



安心院まんだ
ら



小池楓生子

目賀原(まがはら)麻子(あさこ)は、恵良(えら)光夫(みつお)の著なる『仏像入門in福岡』を校正中である。

『仏像入門in福岡』は、福岡市在住の仏像愛好家である恵良が、仏像初心者のために書いたものだ。

仏像を見分けるポイントについて、仏像ごとに簡単に説明された総説から始まり、仏像の知識を持たない者でも読み進めることができる。その後、福岡市内から訪れやすい観世音寺と福岡市美術館を中心に、所有される重要文化財の仏像について説明されている。

この原稿を片手に観世音寺や福岡市美術館を巡れば、各仏像を実際に眺めながら、仏像についての蘊蓄を深めることができる、とのこと。確かに、福岡に住む初心者にとっては、仏像への取っ掛かりになる良著かも知れない。

麻子が共感したのは、個々の仏像の説明の後に差しはさまれる著者のエッセイ風の語りだ。福岡の仏像を見て、さらに仏像を追うならば、やはり京都・奈良にある国宝級の仏像を鑑賞して欲しいとの願いだろう。著者が京都・奈良を訪ねた際のエピソードなどが、ユーモアも交えて紹介されており、思わずクスッと笑われる場面もある。

蜜

六波羅蜜寺といえは、口から六体の化仏が吐き出されて
いるあの空也上人像は、教科書などで誰でも一度は目にし
たことがあるだろう。この寺を私が訪ねた日、ちょうど消
防訓練が予定されていた。宝物館で仏像を見ていた私は、

僧侶の方に訓練の協力を要請された。そのまま宝物館にいてもらえれば、訓練が開始した時点でその方が^現表れ、一緒に避難して下さいとのこと。退職後で時間の余裕もあった私は、もちろんお引き受けした。さて、実際に避難開始。僧侶に続いて私も縁側のような廊下を走って逃げるが、寺周囲の地面に巡らされたスプリンクラーから建物に向かって勢い良く放水されている。言うまでもなく、我々はずぶ濡れになる役回りであった。それでも、悟りを得ている僧侶の方は顔色を変えるでもなく、訓練終了後に「御協力ありがとうございました」と述べるのみだった。夏の盛りの中で、全身びしょ濡れもそれなりに涼しかったが、そのまま次の寺へ向かうにはひどい格好になっていた私。服が半乾きになるまで、六波羅^蜜寺の境内で近所の人達と休ませていただいた思い出がある。

麻子は、素読み校正と呼ばれる、原稿の内容に間違いがないかを吟味する作業に注意を払いながらも、その面白さに思

わず引き込まれそうになる。

福岡市美術館での出来事。

この本を書くために、私はメモ帳と~~シャープペン~~^{シャープペンシル}を持ち、
仏教美術室に入った。途端、右手から近づく攻撃の気配。
入ってすぐの所に立つ金剛力士に日頃の行いを戒められた
のか！と思いきや、パイプ椅子に~~坐~~^座っていた監視員の女性
であった。そして静かに差し出されたのは、一本の鉛筆。
「展示室では金属製の筆記具は認められておりませんので、
これをお使い下さい」とのこと。

文化財を守るという心意気は解るが、何ともお役所仕
事。美術館や博物館の片~~角~~^隅で、膝かけをしてじーっと座っ
ている係員の方々。退屈しているように見えて、実は目を光
らせているのだ。それにしても、驚かされた。

これは、麻子も京都の国立博物館で似たような体験をした
ことがある。麻子の場合、「実際に筆記する部分が金属製で
はないシャープペンシルは、使用できます」とのこと、鉛筆

を借りなくても済んだのであるが。

福岡市美術館には、「なかむら」というレストランが併設されている。市内に調理学校を持ち、食物学科で有名な中村^{学園}大学を有する法人系列の営業なので、展示物を見ずにこのレストランに食べに来るだけの価値もあるくらい、美味しい。

先日、美術館で「福^澤諭吉展」が開催されていた期間、レストランでは諭吉出身の大分県にちなんで、名物の「とり天（鶏肉の天ぷら）」弁当が好評であった。お弁当のデザートには、これまた大分名物の「やせうま（きしめんに似た麺に甘いきな粉をまぶしたおやつ）」が付いており、大分県出身の私は感激した。

特別メニューだけでなく、普段のメニューも美味しそうなものが揃っている。日^替わりのお弁当でも、箱の一角には、前菜としてメロンと生ハムが添えられている、といっ

た次第。

著者の恵良は、現在は福岡市に住んでいるというが、元々は麻子と同じ大分県出身なのだ、と気づいた。

麻子は、小学校の給食で食べた「とり天」を思い出す。給食では、鶏ささみ肉一枚そのままが天ぷらにされ、ウスターソースをつけて食べていた。今、大分で「とり天」といえば、骨を除いてカットされた鶏もも肉が天ぷらにされ、大分名物の「かぼす」を搾ったポン酢につけて食べるとのことだ。

いずれにしても、京都に住む麻子は、本当にしばらくのこと、「とり天」にありついていない。

「やせうま」も懐かしい味である。うどん粉を捏ねた後、両手で一気に引きのばし、「やせうま」麺をつくる。それを茹でるのであるが、きしめんなどと違って包丁で切った麺ではないから、不揃いの幅と長さで、いかにも田舎風の素朴さがある。大分県内の学校では、家庭科の授業で作り方を習う程、伝統ある食べ物だ。

「やせうま」は、麻子に限らず、大分県で育つ子ども達にとって何よりのおやつである。麻子が受験生の夏休み、おやつにどうしても「やせうま」を食べたくなった。母に頼んだが、あいにく既製のゆで麺も、うどん粉も切らしている。

「まあ、何とかなる」と母がつくってくれたのは、ゆで素麺にきな粉をまぶしたものだ。味はともかく、麺の食べ応えの異なるそれは、やはり「やせうま擬」にしか過ぎなかった。

「やせうま」麺を、具沢山の味噌味の丼椀に入れて食べるのが、これも大分名物「だんご汁」。人参、里芋、葱などの野菜の滋味に加え、特産である椎茸の出汁がよく利いてい

る。麻子が大分に帰省する度、必ず食べたくなるメニューだ。

麻子は、懐かしい味を思い浮かべながらも、校正の作業に集中を戻す。

座

坐っている観音像として有名なのは、京都・三千院の阿彌陀三尊（国宝）の脇侍である。観音菩薩・勢至菩薩ともに大和座りという、正座に近い座り方をしている。ちょっと前かがみに、これから立ち上がろうとしていることを意味し、極楽浄土からお迎えに来る姿を表現しているのだ。特に観音菩薩は、蓮でできた台を前に捧げ、「これにお乗りなさい」と臨終を迎えた魂に語りかけるようだ。

この三千院の観音菩薩・勢至菩薩の手つきによく似た石仏の阿彌陀三尊が、私の出身地である、大分県宇佐郡**市**安心院町にいらっしゃる。「桂昌寺の地獄極楽」といって、**市**町の有形民俗文化財に指定されている、石仏で地獄極楽を表現したテーマパークのような廃寺だ。

首相

実は私は、竹下~~総理~~時代に全国に配られた「ふるさと創生金」を利用して、三千院などの京都を旅行できたことがある。桂昌寺の地獄極楽を通して、出身地、安心院の地域振興を行うため、極楽浄土の本家である三千院に勉強しに行くという応募が採用されたのだ。採用して下さった安心院町には本当に感謝している。今から考えれば、税金のばらまきと言えなくもないが、町おこしの結果に少しでもつながっているなら、良しとしてもらおう。

著者は、安心院町出身なんだ、と麻子は思った。麻子は別府市出身で、別府市と安心院町は境界を接している。

平成の大合併により、安心院町は宇佐「郡」から宇佐「市」へ併合されている。麻子は、すばやく校正の朱を入れた。

校正者は、地名などの固有名詞が出てきた場合、間違いがないか、一つ一つ資料にあたり、丹念に調べなければならない。幸い、麻子は大分県については馴染みが深いため、インターネットを利用した簡単な確認作業で済ませられている。

市

本文中にも述べた大分県宇佐~~郡~~安心院町の桂昌寺。実

は、私は幼少時、この桂昌寺のすぐ近くに住んでいた。

桂昌寺は、室町時代に開基された曹洞宗の寺であったが、現在は石仏群が残るのみで、廃寺となっている。以前、桂昌寺の建物が存在した頃の本尊は、福岡県北九州市八幡東区にあるその名も同じ、禅寺の桂昌寺へ売られていった。

この移された経緯は、私の姉が^{トルツメ}がたまたま北九州市の桂昌寺の近くに嫁いでいたことから判明した。姉は、安心院の実家近くにあるのと名前が同じ「桂昌寺」の近所が嫁ぎ先であったことに、ずっと何かの御縁を感じていた。しかし、檀家でもないことから、そこに一度も足を踏み入れたことはなかったようだ。

二十年ほど前、私が久しぶりに北九州の姉を訪ねた折、急ぐ用事もないのならと二人で散歩がてらお参りさせていただいた。その時、自分達が安心院出身であること、安心院の桂昌寺のことを話したところ、御住職は驚いたよう

に、本尊移転の話聞かせて下さった。

大正時代、安心院の有力者の立ち^会合の中、御本尊は北九州へと売られていったという。当時、安心院の桂昌寺周辺の住民からは、移転について激しい反対もあったらしい。そんな日く付きの仏様なんです、と、御住職は私達を御堂へと案内された。

北九州の桂昌寺も曹洞宗であるから、こちらの現在の御本尊は立派な釈迦如来で、御堂の中央に鎮座しておられる。御堂の中、その向かって左側の奥の方の棚に、数体の仏像がいらっしゃって、その中の一つが安心院から移されたものだ。

「こちらの観音様でございます。」と御住職に紹介された仏像。いやはや、想像以上に立派で趣のあるもので^あった。ゴージャスな宝冠をかぶり、静かにうつむく気品のあるお顔。結跏趺坐した姿勢に禅定印を結び、禅寺である桂昌

寺にぴったりの観音様だ。

撮

お許しを得て、観音様の写真を取らせていただいた。私はそれを大きく引き延ばして額に入れ、安心院の桂昌寺で集会所代わりになっている礼拝堂に飾ることにした。安心院の桂昌寺には既に寺としての建物がないから、せめても
の体裁を整えるためである。

ここまで読み進め、麻子は「これは違う!」と思った。

観音菩薩は、確かにほとんどの場合、豪華な宝冠をかぶっており、結跏趺坐することもあるかも知れない。しかし、決して禅定印を組むことはないのだ。

恵良が述べる「観音様」というのは、宝冠釈迦如来ではないかと、麻子は思う。鎌倉時代以降、禅宗が盛んになり、釈迦が宝冠をつけていた皇太子時代の坐禅する姿がつくられることが多くなった。頭部だけを見れば、観音菩薩と間違えかねない仏像だ。

あるいは、胎蔵界の大日如来像である可能性も否定できない。坐る姿や印相の組み方は、胎蔵界大日如来にも当てはまる。ただし、こちらは日本国内での作例が少なく、密教寺院でもない桂昌寺に安置されるというのは、かなり珍しいことになる。

本職が仏教美術研究者である麻子からすれば、この像を一目でも見れば、答えはすぐにも出せる。きちんと全身が撮ら

れている写真であれば、それでも構わない。

残念ながら、『仏像入門in福岡』の原稿内には、その写真やイラストは取り入れられていない。

麻子は、まず北九州の桂昌寺のホームページを当たろうと、パソコンで検索を始める。しかし、観光寺でもない地方の小さな寺院が、自身のホームページを持っていることは、ほとんどない。桂昌寺の住所や電話番号はさがせたものの、境内の様子や、ましては所有仏に関する情報は全く分からなかった。

次に、安心院の桂昌寺について検索してみる。恵良の原稿によると、礼拝堂に像の写真を飾っているとのこと。もしもその様子を収めたホームページがあれば、判断がつく。が、やはりこちらも寺の公式ホームページはないようだ。

安心院の桂昌寺跡にある史跡「地獄極楽」に関しては、安心院町が観光スポットとして力を入れていることもあり、訪れた人の感想をつづったブログなども散見された。しかし、桂昌寺そのものについては廃寺となっているためでもあろう、何の情報も得られることはなかった。

昼間、研究室での仕事を終え、夕食後に家事も済ませ、就寝の準備もできてから校正作業にとりかかった麻子は、ここまでで既に夜も更けていることに気づいた。しかたなく、麻子は、校正依頼主である出版社にメールを入れておく。著者の恵良に連絡を取ってもらい、問題の仏像の写真なりを実際に見せてもらうためだ。

翌日、職場から戻った麻子は、すぐにパソコンを開き、出版社からのメールを読んだ。その内容は、実に奇妙なものだった。何と、著者に連絡が取れない状況だという。

担当編集者によれば、『仏像入門in福岡』は、仏教美術の季刊誌へ投稿されたとのこと。二号先に予定している「地方の美仏」特集に対して、読者からの原稿も募集したところ、「恵良」なる著者から、原稿用紙に手書きの文章が寄せられた。

編集部で原稿の採用を決定し、実際に雑誌に掲載する過程で、出版社から著者に対しては、いろいろな確認事項がある。それを連絡するために、応募の際に記入されていた著者連絡先に郵送や電話をするも、どれもつながらないようだ。

こういった場合、本来ならば原稿はボツとされる。しかし編集部は、この原稿を眠らせるのは、内容からするとあまりに勿体ないと考えた。調べる限り、盗作の箇所もないようである。硬派の学術雑誌ならともかく、愛好家のための娯楽誌に対する投稿という位置づけからすれば、それと断り書きを入れた上で、掲載しても良いのではないか。

著者の「恵良」が、出版社に対しても素性を明かしていないことに関しては、何か特別の事情でもあるのかも知れない。が、それについては、出版社側として、これ以上追及する予定もないとのことである。

実際に自分の目で見るとは、と麻子は思った。

仏像そのものを見るのであれば、北九州の桂昌寺に行くべきだろう。しかし、麻子は、安心院の桂昌寺を訪ねたいという思いが強くなっていた。連絡の取りようのない「恵良」が住んでいたという安心院の桂昌寺周辺とは、いったい、どんな所なのか。

安心院の桂昌寺であっても、礼拝堂に像の写真が掲げられているということなので、問題の仏像が観音菩薩なのか否かについては、おそらく判断できると思われる。それに、麻子

は、しばらく帰省していない別府の実家にも、この際、顔を出しておこうかなと考えていた。

昭和四十二年九月、別府市の目賀原(まがはら)家に麻子が生まれる。この頃、日本にはミニスカート・ブームが到来していた。

昭和五十八年四月、麻子、大分県立別府青山高等学校に入学。

八月、全国高校野球選手権大会で、大阪PL学園高校が、桑田真澄・清原和博の一年生コンピの活躍で優勝。二人を、麻子はとても同級生とは思えなかった。

十月、日本で初めての体外受精児誕生。

十一月、NHK朝の連続テレビ小説『おしん』が視聴率六十パーセント以上を記録。麻子のクラスでも、文化祭の出し物は『おしん』をベースにした寸劇であった。

この頃より、麻子は京都・奈良などの神社仏閣に並々ならぬ興味を示す。家にあった、関西地方の旅行ガイドブックを眺めては、「古都」に思いを募らせていた。高校二年、三年の学級担任だった先生が、奈良女子大学出身だったせいもあるか。京都に上ることに憧れを持つのは、まるで『更級日記』のようだと思っている。

その念願かなって、昭和六十一年四月、麻子は京都の大学で、美学美術史を学び始める。中でも、日本美術を専攻したのはいうまでもない。

同月、男女雇用機会均等法が施行。チェルノブイリ原子力発電所事故。

平成二年四月、麻子は、学生時代の研究室に所属したまま、大学院修士課程に進み、研究を続ける。考古学の領域も、陶芸文化の研究も魅力的であったが、仏教美術の道を選択したのは、高校生の頃から持ち続けていた情念からかもしれない。

六月、当時の礼宮さまが結婚され、秋篠宮家を創設。

平成四年四月、麻子、研究室の無給助手に。

五月、国家公務員の週休二日制スタート。九月、毛利衛さんがスペースシャトル・エンデバーに搭乗して宇宙へ。十月以後、いわゆる就職氷河期に突入。麻子は、塾の講師や、家庭教師などのアルバイトをしながら、日夜研究に励んだ。

その甲斐あり、平成六年四月、麻子は有給の助手（現在の大学での呼名を用いれば、助教）となる。研究室の学生や大学院生の指導を任されるという仕事は増えたものの、それによりきちんと給料が支払われるという、やはり生活の心配をしなくて済むようになったのは助かった。以降、麻子は本当に研究に没頭することができた。うち一年間は、共同研究者である東京の大学の研究室へ出向扱いもあったが、京都を拠点として、学会発表も重ねていった。

平成十四年四月、学習指導要領の見直しが図られ、学校完全週五日制のゆとり教育がスタート。

同月、麻子は講師に昇格する。この頃、文部科学省による大学編成の影響で、仕事上の雑務が非常に増えた。他人の上に立って仕事をするという事は、現場で活躍する時間を減らすことでもあることは、麻子も理解している。しかし、本当に大変な毎日であった。

九月、小泉首相が朝鮮民主主義人民共和国を訪問。北朝鮮が、日本人拉致問題を公式に認めた。

平成十九年九月、麻子は不惑の年を迎える。研究室の仕事も大切であるが、自分が何者なのかを見つめ直した一年。

たまたま目にした新聞の折り込み広告の、「茶道教室」の文字になぜか引かれ、翌年の六月、カルチャーセンターで体験入門。これまで茶道や華道の心得は全くなく、興味もなかった麻子であったが、六歳の六月の習い始め、ではなく、四十歳の六月の手習い開始。月一回、師範の家ではなく、カルチャーセンターでというので気軽に始められた、これ幸い。

茶碗を二回まわして飲むこと以外、帛紗の捌き方一つさえ知らなかった麻子であったが、学び始めると何事でも面白いもの。入門書を買込み、ちょうど教育テレビで入門編のシリーズが放映されていたから録画して何度も見直した。略盆点前は家でも気軽にできるので、さっそく千歳盆セットも購入。和菓子を用意して、日曜日に点前を楽しむ習慣ができた。まだ濃茶のレッスンまで進んでいないながらも、麻子は将来、是非、茶事に参加したいと思っている。

校正者としての仕事も、実は、趣味の延長のようなもの。

麻子が研究者として文章で発表する場合、学術論文であれば、掲載する学術雑誌の編集者から依頼された「査読者」が論文に手を入れる。「査読者」は、主に、その専門分野の大学教授などが占めている。一方、専門家が書いた文章として、一般誌に載る場合には、出版社に所属する校正者によって朱を入れられる。

この校正という仕事、単に「てにをは」の間違いを正すような簡単なものではない。もっとも、校正の第一段階は、「原稿引き合わせ」という事務的な作業もあるが、次の「素読み」段階になると、文章の内容をひとつひとつ吟味しつつ、事実と相違ないかの検証が必要になる。

出版界では、「後生、畏るべし」をもじった言葉に「校正、畏るべし」というのがある。校正者の適切な指摘によって、誤った内容を文字として世間に出さずに済み、編集者が命拾いをするのが度々ある、というのだ。さらに、編集者だけでなく、著者の思い違いさえ正してくれることもある。昨今、ベストセラー作家となったある科学者のエッセイにも、そう書かれていた。

麻子も、以前、一般誌に寄稿したものの校正刷が届いた時、本当にびっくりした。麻子の専門分野に対して、疑問点を、インターネットの資料なども添えながら、次々に指摘してきたのだ。幸い、麻子の原稿内容が間違っ

ていた訳ではなかったが、読者に曲解を与えかねないので、記述を大幅に変更した。その指摘が、基本的に専門家でない者からなされたという点で、麻子は校正者の能力に非常に畏れ入った。

と同時に、校正という仕事に興味を持った麻子は、そのまま校正の通信教育を受講し、試験も受けて、校正者の資格を得た。几帳面な性格、悪く言えば、人の欠点を見つけるのが上手だと自覚している麻子にとっては、かなり向いている仕事である。収入源として考えているのではないが、校正の仕事をまわしてもらうことにより、自分では手に取らないような書籍の文章に出会えることも、一つの勉強になると考えていた。

校正者の互助システムに加わり、本職に差し支えない範囲で校正の仕事も手がけている麻子である。やはり、美学美術史というキャリアを活かして、その方面の文章校正を依頼されることが多かった。

前置きが長くなったが、そんなことから恵良光夫の『仏像入門in福岡』に巡り会った麻子は、安心院を訪れるために、別府に帰省することにした。

平成二十二年の冬、麻子は安心院訪問のため、一時帰省した。

帰省翌日、さっそく麻子は、母の軽自動車を借りて、一路、安心院をめざす。別府の鉄輪にある坊主地獄の横から、安心院への道へ入った。十年前くらいに、別府から安心院まで有料道路も通ったが、まずは一般道からのんびりと運転することにした。明礬温泉から十文字原高原、「アフリカンサファリ」への入口を過ぎると、もう安心院町だ。麻子が子どもの頃は、舗装されていない細い道をドライブに連れられた記憶があるが、さすがに今ではきれいに整備されている。時折出会う路線バスや大型トラックと、カーブで離合する際に、ちょっと狭いと感じることがあるくらいだ。東椎屋の滝への入口を過ぎ、別府を発って四十五分くらいの頃、「桂昌寺跡地獄極楽」の道案内が目に入った。ここで麻子は右折し、のどかな田園地帯の中を少し走ると、やがて駐車場が見えてきた。

麻子は、安心院に来る前、仕事柄、安心院についての予習を欠かさなかった。安心院町は、宇佐市に合併される前の、宇佐郡安心院町時代の町制では、人口一万にも満たない小さな山村である。盆地の地形を利用して、ブドウ栽培およびそれを利用したワイン産業が有名だ。また、盆地を流れる清流に生息しているスッポンを養殖して、スッポン料理でも名を馳せている。盆地の素晴らしい風景は、司馬遼太郎が、「盆地の景色として日本一ではないでしょうか」と葉書に書いた程だ。

まずは、安心院の地名縁起から。安心院（あじむ）とは、知っている者でなければ、なかなか読めない地名である。安心院は、その昔、盆地湖が徐々に干潟となり、「芦が生えて」いたので、「芦生（あしぶ）」と呼ばれ、「あじむ」に転訛したという。その後、奈良時代後期に居住していた宇佐公比古（きみひこ）が、「安心」の二字を当てようになった。地形と豊かな実りに恵まれた「安心して生活できる桃源郷」と考えたのであろう。さらに「院」の字が添えられて「安心院」となったのは、平安初期に倉院制度が布かれた名残と思われる。安心院は、千年以上の古代に、国営倉庫を置く程の穀倉地帯として、政府からも重視されていた場所なのだ。最近では、松本清張が、小説『陸行水行』の舞台として取り上げている。清張は、別府からでなく、宇佐市の中心部、四日市（よっかいち）から安心院へ入ってきたようだ。「バスは山路の峠を走るが、その峠を越すと山峡が俄に展けて一望の盆地となる。早春の頃だと、朝晩、盆地には靄が立籠め、墨絵のような美しい景色となる。」と紹介している。

そういえば、松本清張の作品集にあたっている時、麻子はふと「恵良」の名前を目にした。『仏像入門in福岡』の著者である「恵良光夫」の名字だ。清張の小説『火の記憶』の中にその名前が出てくる。恵良光夫も、清張が安心院びいきであることを知っており、ペンネームを拝借したものかも知れない。恵良光夫が消息を断ったあたり、まるで『陸行水行』の主人公のようでもある。

麻子は、駐車場に車を止め、石段を上った。桂昌寺跡に到着した麻子を「ようおいでました。」

と迎えてくれたのは、七十五歳になるという男性、安心院町観光協会のガイドである御筆（みふで）さんであった。桂昌寺のある東恵良という集落に生まれ育った御筆さんは、高校の国語教師を定年退職された後、ボランティアガイドとしての活動を続けられている。麻子は、あらかじめ御筆さんにガイドを依頼していたが、要請のない日でも、御筆さんは散歩がてら桂昌寺にたたずむことが多いという。

「さっき上がってこられた石段、何段あったか分かりますか？ 実は、三十三段なんですよ。亡くなられた人を三十三回忌まで供養するって言いますよね、あれから来てるんです。」と、さっそくガイドが始まっている。

麻子が桂昌寺を訪れた最大の目的は、本尊が観音様であったのか、宝冠釈迦如来であったのか、はたまた胎蔵界大日如来であったのかを知ることである。一刻も早く、礼拝堂の写真を見たい気持ちを抑えて、麻子は御筆さんのガイドに従い、常道の桂昌寺めぐりを始めることにした。

まず、入口には地獄極楽についての説明看板が立てられている。

桂昌寺は室町中期の開基であったが、江戸時代に入ると荒廃し、無住の寺となっていた。江戸後期、天明の頃、安心院の一老僧が桂昌寺復興の悲願から、午道法印（ごどうほういん）（魏純（ぎじゅん））という江戸の傑僧に巡り会い、事情を話して、ここ東恵良に案内したという。午道法印は、村人の協力も得て、桂昌寺の裏の岩に約七十メートルの洞窟を掘り、大衆教導のため、「地獄極楽」を造成したのだ。

「二百年程前のものですが、ノミで掘った当時のままだが残されています。洞窟の地獄極楽は、全国的にも珍しいと言われているんですよ。」と御筆さん。確かに、専門家の麻子も、洞窟の地獄極楽は他で見たことがない。

麻子は、六地蔵の傍らを通り、御筆さんとともに、地獄極楽へと入っていった。

洞窟の入口で待ち構えていたのは、地獄の裁判官たちが並ぶ閻魔の庁。閻魔王を中心として、牛頭馬頭（ごずめず）、五道冥官、初江王（しょこうおう）などが並んでいる。閻魔が亡者の審判を行うために持っている、人の生前がすべて映し出されるという浄玻璃鏡を模してであろうか、足下には小さな池がある。ここで嘘をつけば、閻魔に舌を抜かれるのだろう。幸い、閻魔王は、閻魔帳までは持っていないようだ。

「前は、これは拝観料はいただいとらんかったんです。でも、『地獄の沙汰も金次第』といえますから、今は、百円ずつ出してもらおうようにしたんです。」と御筆さん。地獄に落ちては困ると、麻子は慌てて財布を取り出し、賽銭箱へ入れた。

窟内へ入っていくと、十王信仰の通り、太山王（泰山王）、五官王、変成王（へんじょうおう）などがいる。ちなみに、十王というのは、仏教や道教で、地獄において亡者の審判を行う、いわゆる裁判官的な役割を果たすと

されている。初七日から七日ごと、七七日（四十九日）まで、さらに百か日、一周忌、三回忌には順次、十王の裁きを受けるという信仰である。ここ桂昌寺の地獄窟では、初七日の審理を担当する十王から順に並んでいる訳ではなさそうだが、それも御愛敬か。

道はそれから、右手の地獄道と、左手の極楽道へと分かれるが、まず地獄道を進むことにする。地獄道は、四十メートルあるそうだ。

「頭を打たんように気をつけて下さいね。」

と御筆さんが声をかけるように、地獄道は天井が低くなっている箇所もあり、幅も狭い。じめじめと湿った岩肌で、触れたくない様子だ。

「昔は、ゲジゲジがびっしりおって、タオルでもかぶって歩かんと、ゲジゲジがぽとっと落ちてきよったんですよ。コウモリもおりましたね。」

という説明に、虫類の大嫌いな麻子は顔をしかめた。今でこそ、コードを引いて、窟内には電球があちこちにぶら下がっているが、その昔はそんな設備もなく、懐中電灯を持って入っていたという。薄暗い中では、ゲジゲジも繁殖するはずだ。

十王のひとつ、秦広王(しんこうおう)を過ぎると、「胎内くぐり入口」と書かれた穴がある。這って通れる程の十三メートル程の道が続いており、極楽に出られるという。罪深き人間も、生前は悪いことはしていないだろうとのことで、母親のお腹の中の胎児は、地獄の苦しみを受ける前に極楽に救われるとの道がつくられたらしい。が、現在は真っ暗で水もたまっており、通行禁止となっている。

横には、三途の川の奪衣婆がいた。中国から伝わった十王信仰だけでなく、日本の地獄観も取り入れられているようだ。じつとりと苔むして笑う奪衣婆は、何とも不気味だ。

「亡くなった人の着物を剥ぎ取って、罪の重さを量ると言われています。」

と、御筆さんの説明が入る。

三途の川の向こう側には、当然、賽の河原がある。

「子供が死ぬと、後から来る両親の目印のために石を積みねばならんです。その積んだ石を、鬼が蹴散らかしてしまいうんですわ。泣きながら積んでも、また蹴散らかされてしまいます。そこに現れて救ってくれるのが、お地蔵さんなんです。」

という御筆さんの説明に、麻子が振り返ってみると、石の上にちゃんと地蔵菩薩がいらっしやる。ただ、この辺については、本来の仏教とは関係なく、民間信仰も混じっているらしい。

さて、平等王を過ぎると、血の池地獄にやってきた。池の両脇には、赤鬼・青鬼が立っている。

順次、宋帝王、都市王、五道転輪王と裁きが終わると、亡者も三回忌を迎える。もう地獄を抜けても良いという裁きが下ったのであろうか、洞窟も地獄道の入口付近へ再び戻っており、極楽窟へと進めるようになっている。

菩提坂を越えると、岩肌も乾燥して、やや広くなった極楽道。やはり歩きやすい。ゲジゲジも、極楽道にはほとんどいなかったという。極楽道は、二十五メートル程だそうだ。

十王信仰に対して、極楽窟には十三仏が並んでいらっしやる。十王が検察官とすれば、弁護士の役目を勤めるのが、十三仏だ。七回忌から三十三回忌まで、十王の後の審理もあるので、十三という数になっている。

順に、不動明王、釈迦如来、文殊菩薩、普賢菩薩、薬師如来、地蔵菩薩、弥勒菩薩、観音菩薩、虚空蔵菩薩、阿閼如来、大日如来、勢至菩薩、阿弥陀如来と通って、外界へ出る。

途中、「胎内くぐり」の出口もあった。子供を救ってくれるという、かわいい子安地蔵が待っていた。

極楽窟の出口付近には、阿弥陀如来立像が彫られており、両脇には観音菩薩、勢至菩薩がいらっしやって、阿弥陀三尊像となっている。

この観音菩薩の手は、蓮の花を持って、ここまでたどり着いた亡者に対して、

「この上にお乗りなさい、極楽へ連れて行ってあげますよ。」

と確かに言っているようだ。麻子は、同じ手つきをした京都大原の三千院の阿弥陀三尊像を思い出す。

この来迎弥陀たちの上の岸壁には「南無阿弥陀仏」の六文字が彫られており、西を向いて夕陽に映えることから、「夕日の名号」と呼ばれている。

阿弥陀三尊の横には、「針の耳」と呼ばれる縦穴がある。岩山の上の極楽浄土へ登るための、高さ五メートル程の垂直の穴だ。鎖が下がっており、これを伝って登るとのことらしい。

「まるで、芥川龍之介の『蜘蛛の糸』みたいでしょう。どうぞ気をつけて登って行って下さい。」

下調べで、これを登るのはハイキングの格好をしていなければ危ないと書いていたので、麻子がそれなりの靴を履いてきている。さっそく、鎖に向かった。

御筆さんは続けて話す。

「ちょっと前になりますか、腰が悪いという中年の男性がここに来てですね。それでも頑張って、この鎖を登って極楽まで行ったら、いっぺんで腰が良くなったということでした。仏様の御利益ですかねえ、その人もお礼参りに来てくれましたよ。まあ、本当にこの『蜘蛛の糸』に効き目があったんかどうかは、『誰も知らない』というところですかねえ。」

同じ龍之介の『羅生門』の一文を引いたと思われる御筆さんの言葉に、麻子は思わず笑いそうになるが、鎖を放す訳にはいかない。足を一步一步、岩肌のくぼみにかけながら、極楽へと登っていった。

穴を抜けると、岩山の上からは、眺めの良い景色が広がっている。豊後富士・由布山をバックに、ゆるやかな棚田があり、まさに極楽から見る桃源郷の世界だ。

そして、振り返った丘の上こそ、極楽浄土。阿弥陀如来をはじめとする多くの菩薩たちがいらっしやる。地獄道から極楽までのストーリーがよくできている。

「この阿弥陀様は、もう五十年以上も前、桂昌寺のすぐ下に住んでおった人が、たまたま見つけたんですよ。

。恵良(えら)さんっていう名前でしたか、境内の掃除やら草花の手入れやら、報酬ももらえんのによくして下さったおじいさんがおりました。今ではここも芝生が刈り込まれてますけど、前は茫々の茂みだったらしいです。ある日その恵良さんが、ここを綺麗にしようと上ってきて、もっと上の方の叢の中に何か光るのを見たそうです。不思議に思って近寄って草を刈ってみると、阿弥陀如来がお座りになっとったことなんですわ。慌てて周りも鎌を入れたら、二十五体の来迎菩薩が、ちゃんとおいでたんです。」

麻子は、「恵良」という名前に驚き、「恵良光夫」が『仏像入門in福岡』の著者であること、『仏像入

門in福岡』の校正を麻子が担当して「恵良光夫」に連絡が取れないこと、麻子が今日ここに来た最大の目的は礼拝堂の写真が観音菩薩が否かを確かめることであることを、手短かに御筆さんに説明した。

「そんなことでしたか。ここに住んでいた恵良さんはもう亡くなられましたけど、息子さんが遠くにおられるということでしたから、その本を書いた人は、もしかしたら息子さんかも知れませんなあ。まあ、礼拝堂に行きましょう。」

と御筆さんは麻子を案内する。先程の竪穴を戻るのではなく、岩山の逆側から階段で下りる歩道がついているようだ。

岩山を下りたところに、礼拝堂はある。御筆さんは、入口のサッシ戸を開けた。広さは八畳程だろうか。近所の人たちの集会にも使うとのことで、湯を沸かしたりもできるようなガスキッチンも備えている。

「これが御本尊様です。」

と御筆に示された写真は、宝冠釈迦如来の像であった。

見事な宝冠をかぶってはいるが、結跏趺坐して禅定印を組んでいるので、観音菩薩ではありえない。胎蔵界大日如来は宝冠に五仏が彫られることが多く、衣を左の肩だけにかける偏袒右肩の姿が多い。よって、両肩に衣をかけている通肩の姿をとったこの像は、桂昌寺が曹洞宗であったことも含めると、宝冠釈迦如来であると考えべきであろう。

安心院までやってきた目的を果たし、満足して振り返った麻子の目に入ったのは、礼拝堂の後ろの壁上方に掛けられた一枚の額縁。ここには、明らかに観音像とわかる仏画が入れられていた。

「この絵は？」

と麻子が尋ねると、御筆さんは、そうそう、といった感じでまた説明を始める。

「これも恵良さんが関わっているんですよ。ここに住んでいたおじいさんの方の恵良さんですよ。」

もう二十年以上も経ちますが、ある日の昼下がり、桂昌寺を訪れてスケッチをしていた一人の若者が、恵良さんに、近所にある檜本磨崖仏への行き方を尋ねたそうです。恵良さんは、その若者が重そうなりユックサクを担いでいたんで、自分が預かっておいていいからと、道を教えてあげました。

若者は、帰りの道を間違えたようで、戻って来たのは夕暮時だったそうです。近所に、宿になるようなお寺やお宮はないかと恵良さんに尋ねるけれど、当時はまだこの礼拝堂もなかったし、恵良さんは自分の家に泊めてあげたそうですわ。

夕食を共にして話を聞くことには、若者は旅をしながら絵の修業を続けていた長崎の人だったんですね。翌朝、恵良さんの奥さんは、若者におにぎりを持たせたそうです。若者が長崎に帰った後、恵良さんには海のもののお礼が届きました。

翌年には、その若者の絵の師匠も一緒に、また桂昌寺にいらっしゃったそうです。その時には礼拝堂も建っていて、案内したところ、師匠は入るなり、『ここは観音様が祀られるべき所だ』と言ったらしいです。そして、長崎に戻ってすぐ、御自分の描かれた観音様の仏画を送ってきたんですよ。」

宝冠釈迦如来を本尊に持っていた禅寺であるが、十王・十三仏からなる地獄極楽があり、観音様にも縁があり、まるで曼荼羅のようだと麻子は思う。

「ところで。」

と麻子はまた質問する。

「先程おっしゃった檜本磨崖仏というのは、ここから近いんですか？」

「車ですぐですよ。今から御案内しましょう。」

結局、麻子の運転する車に御筆さんを乗せて、案内してもらうこととなった。

桂昌寺の駐車場を出て、二、三分ほど山の方へ車を走らせると、左手に「檜本磨崖仏」への矢印を示す立札が見えた。そこから左へ曲がり、きれいに舗装された林道を進むと、右手に磨崖仏の看板が見えてくる。

路肩に車を止め、道端の磨崖仏を見上げると、麻子の予想よりずっと大きなものだった。案内板を読むと、縦四メートル半、幅四十メートルの二段の岩に彫られているらしい。室町時代に彫られたもので、かまぼこ型、半肉彫りと呼ばれるその時代の磨崖仏の特徴を代表する史跡とされている。

「大変価値のあるもので、県指定文化財にもなってるんですが、傷みがひどくて、修復途中なんです。」

と御筆さんは付け加えた。

手すりのついた石段を、すべらないように登っていく。

上段の不動明王像を中心として、薬師三尊・十二神将・釈迦三尊・大日如来・地蔵菩薩・十王像などが刻まれている。合計四十五体の仏像が彫られており、総数の多さでは、あの有名な国宝である白杵石仏を抜いて、日本一という。まさにここも曼荼羅の状態だ。

桂昌寺跡地獄極楽で多くの仏に会い、檜本磨崖仏でも種々の石仏を目にした。安心院の中の、ほんの狭い一地域の中でである。

「嗚呼、安心院まんだら！」

と麻子は心の中で叫んだ。

御筆さんと別れた後は、麻子は宇佐別府道路という有料道路を通して、別府へ帰った。安心院の中心部から五分程の距離にあるインターチェンジから入り、快適なドライブで、別府までほんの三分で走れる。途中、大分自動車道の高速道路に合流し、福岡方面へも向かえる。この地域の交通も、昔に比べると随分と便利になったものと思った。

別府のインターチェンジで下りて、麻子は、自分の高校生時代から行っていた和風喫茶へ向かった。

店で、麻子は遅い昼食に「だんご汁」を注文した。おそらくは、デザートに「やせうま」を追加注文することだろう。

以下は、麻子が出版社に送った原稿である。

出版社とは、以前、麻子が『仏像入門in福岡』の校正を依頼された、仏教美術季刊誌を発行している会社。恵良光夫の『仏像入門in福岡』が掲載された三ヶ月後、それに対する返歌のような形で、麻子の文章が載ることになったのだ。

山岳仏教地域における多宗派の仏像 ～ 大分県宇佐市安心院町の仏たち

大分県宇佐市安心院町(うさしあじむまち)。安心院を「あじむ」と読める方は少ないかも知れない。

安心院町は、大分県北地域にある、人口六千人ほどの小さな町である。平成の大合併までは、「宇佐郡安心院町」であった。盆地の地形を利用したブドウ栽培、ワイン醸造、それからスッポンの養殖地として有名である。九州の人なら、サファリパークがある町としても聞く地名であろう。

この安心院町、実は、知る人ぞ知るロマンの町でもある。松本清張が、『陸行水行』で邪馬台国九州説を展開するために、わざわざ安心院町を訪ね、小説の舞台としている。

さて今日は、この安心院町に、再び歴史ロマンの灯を点してみよう。(残念ながら、私が松本清張氏のような筆力を持っていないため、可能であるかはわからないが。)

といっても、事の発端は、私自身ではない。この〇〇誌の前回号に掲載されている、恵良光夫さんの『仏像入門in福岡』から発している。

前回号をお持ちの方は、頁をめくって欲しい。『仏像入門in福岡』の中には、安心院町にある廃寺、桂昌寺の本尊である宝冠釈迦如来が、北九州市の寺へ移された経緯が述べられている。仏教美術を専門とする者にとって、このエピソードは、なかなか興味をそそられる話題であった。

奇しくも、私は、安心院町に隣接する、温泉で有名な別府市出身である。早速、帰省かたがた、安心院町を訪問した。そして、山岳仏教美術の宝庫である大分県北地域において垣間みられた多宗派の仏像について、語ってみようと思う。

安心院を私が訪れた際、桂昌寺本尊の宝冠釈迦如来は、寺跡の礼拝堂に写真が飾られていた。仏像実物は、北九州市八幡東区の、その名も同じ桂昌寺に移転されている。

北九州市の桂昌寺にも行き、像を拝ませてもらったが、実に立派である。像高七十センチ程で大きなものではないが、南北朝時代の作とされ、ゆったりとした風格に満ちている。

そもそも、重要文化財級の宝冠釈迦如来が、大分県に存在していたこと自体が珍しい。宝冠釈迦如来は、鎌倉時代以降、禅宗が盛んになり、つくられることが多くなったものである。有名な所では、京都南禅寺山門の宝冠釈迦如来や、鎌倉建長寺のそれがある。いずれも、中世に禅宗が栄えた日本の大都市の寺院に祀られている。

そんな宝冠釈迦如来が、なぜ安心院にあったのか。

もちろん、現在、日本の各地方で、宝冠釈迦如来を散見することはできる。しかし、いずれの像も、主に南北朝時代以降に畿内で作られ、地方に流出したものと考えられている。

では、桂昌寺の宝冠釈迦如来は、どのような経緯で安心院へ持ち込まれたのか。そこから述べてみよう。

安心院に宝冠釈迦如来を持ってきたのは、当時、豊後の国を治めていた大友宗麟(1530-1587)とされている。勢いを持って、京都まで兵を進めた宗麟は、南禅寺にあった宝冠釈迦如来を何らかの方法で手に入れ、豊後に戻る官道わぎにあった桂昌寺へ置いたとのことだ。

大友宗麟は、日本を代表するキリシタン大名として有名だ。豊後の城下町、現在の大分市中心部である府内には、当時をしのぶキリシタンゆかりの遺跡が数々と残されている。銘菓「ざびえる」は、「やせうま」と並んで、大分県を代表する土産だ。

キリシタンとして洗礼も受け、その後、神社仏閣を徹底的に破壊する行為に出た宗麟だが、元来は禅宗に染まり、京都に居る時は、一流の茶人でもあった。京都、大徳寺内には、瑞峯院という、宗麟の菩提寺もある(大徳寺は臨済宗南禅寺派)。

瑞峯院は、素晴らしい雰囲気のある塔頭である。庭園は、いずれも昭和の時代に、時の建築家によって設計されたものだが、宗麟の思いが込められた庭となっている。方丈正面の独坐庭は、石と縁と砂とで、半島と入り海が描かれているという。私には、それが、宗麟が府内から見ていたであろう別府湾と佐賀関半島に思えて仕方がなかった。裏の閑眠庭には、宗麟のキリスト教にかけた思いが、十字架に配置された石組で表されている。

瑞峯院では、茶を所望することもできる。正月が明けた睦月下旬に私が訪れた際、茶室のお軸は「梅花破雪薫(梅の花、雪を破って薫る)」、茶碗には干支の兔が描かれていた。振り出しからいただいた大徳寺納豆は、いかにも通好みの味であった。

話は戻り、その宗麟が、なぜ京都から持ち出した宝冠釈迦如来を、府内まで持ち帰らずに安心院に置いていったのかは、想像の範囲でしか分からない。

南禅寺の僧侶をおどして、半ば強奪するように持ち出した宝冠釈迦如来を、府内の自分の城に持ち込むには、宗麟といえども余りに心がとがめ、軍道沿いに立ち寄った禅寺である桂昌寺の僧侶に託すことにし

たのか。

宗麟は、後に1586年、島津軍に攻められた時、安心院の竜王城に逃げ込み、豊臣秀吉に助けを求めている。以前、宝冠釈迦如来をくれてやったことに対する安心院からの恩を頼りにしたのであろうか。キリシタンの跡は少ない安心院町であるが、宗麟と安心院は、意外に関連が深いのだ。

総論に戻す。

密教から発展した山岳仏教文化地域ともいえる安心院で、禅宗の仏像も存在していたという、混在感。しかし、これは仏像などの仏教美術だけに言えることではなく、仏教宗派の広がりそのものの多様性でもあった。

鎌倉時代、日本に禅宗を広めたのは、有名な栄西である。中国から禅宗を学んで帰り、茶を飲むことも同時に普及させた。

が、実は、栄西ももともとは密教僧で、中国へ渡ったそもそもの目的も、密教を学ぶためである。当時の中国の仏教は、既に密教は衰え、禅宗が盛んであった。よって、栄西も禅宗を学ばざるを得なかった訳だ。そして、日本に戻って禅宗を広めた栄西だが、ずっと密教僧であり続けたという。

しかし、これは不思議なことではない。もともと、禅宗は栄西によって初めて日本にもたらされたものではなく、平安時代に天台宗とともに、中国から日本へ入ってきていたのだ。

天台宗が日本で広く受け入れられたのに対して、禅宗は当初、軽視されていた。しかし、その後、天台宗は密教を取り入れ、密教僧の栄西が禅宗を復活させることとなった。栄西が京都に開いた建仁寺は、禅宗（臨済宗）の総本山としてよく知られているが、開山当初は、天台宗と密教と禅宗がミックスされた状態だったと言われている。

この密教と禅宗、「自力本願」の教えであることが、仏教の諸宗派の中でも共通性が高い。「即身即仏」をめざす密教と、坐禅により仏になることをめざす禅宗。

前述した宝冠釈迦如来も、華嚴宗を取り入れた禅宗の仏とされている。華嚴宗は、毘盧遮那仏（のちに密教の大日如来に発展）を本尊とする奈良時代の仏教。そう言われてみると、宝冠釈迦如来は、胎蔵界大日如来に非常によく似ている。仏像という面から見ても、密教と禅宗は非常に結びついているようだ。

さて、桂昌寺についての詳述に戻る。

時代は下って、桂昌寺は江戸時代に入ると荒廃し、無住の寺となっていた。前述した、桂昌寺の本尊、宝冠釈迦如来は、それでも寺内に保管されていたのだろう。現在の日本各地の山村にある仏像と同様、村落の人々によって細々と拝まれていたのだろうか。

そして、江戸後期、天明の頃、安心院の一老僧が桂昌寺復興の悲願から、午道法印(ごどうほういん)という天台宗の傑僧に巡り会い、事情を話して、東恵良に案内した。午道法印は、村人の協力も得て、桂昌寺の裏の岩に約七十メートルの洞窟を掘り、大衆教導のため、「地獄極楽」を造成した。1820年のことである。

桂昌寺は曹洞宗の寺だ。偶像崇拜を行わない禅宗の教えに反するかのごとく、これでもかと描き彫られた地獄極楽の世界。「地獄」の概念は、平安時代から日本に広く知られており、「極楽」も平安後期の末法思想から、貴族階級を通して各地へ広がった。さらに、鎌倉時代、浄土宗、浄土真宗が布教されてから、「極楽」は庶民にとっても憧れの対象となる。

密教から発展した山岳仏教文化地域である安心院で、それも禅寺において、浄土教の概念である「地獄極楽」を通して寺の復興をはかる。天台宗の僧である午道法印も悩んでいたに違いない。しかし、時は天明のききんの世。「地獄極楽」を彫ることにより雇用をつくりだし、庶民の生活をまもる。仏教の宗派にこだわらず、釈迦の教えを実行する。本尊の宝冠釈迦如来も、優しく見守っていたことであろう。

そして、桂昌寺は、時の中津藩主、奥平昌高（1781－1855）によって、保護された。

奥平昌高は、政治的にも名君と言われているが、それだけではない。自ら蘭学を学び、そのために隠居、今でいう早期希望退職までした人物である。日本で最初の解剖学書『解体新書』の翻訳に役立てて欲しいと蘭語辞典を寄附しているが、このことは大分県人にもあまり知られていない。

安心院には、キリスト教に献身した大友宗麟だけでなく、蘭学に心を奪われた奥平昌高の足跡も見られた。異国文化の一片も感じられると言えようか。

余談であるが、桂昌寺に「地獄極楽」を彫った午道法印巍純は、その三年後の1823年、奥平昌高のすすめで鈴熊寺（現在の福岡県築上郡吉富町、当時は安心院と同じ豊前国）に移住し、桂昌寺と同様に荒れていた鈴熊寺の本堂や庫裏・鐘楼などを再建している。そして、「涅槃石」を残している。（鈴熊山の山腹には、高さ二メートル、横三メートルの巨石があり、七十センチメートルほどの釈迦の涅槃像を取り囲んで、諸菩薩や佛弟子などが浮き彫りされている。午道が、巨石の下に法華経の一字一石を埋め、涅槃像を彫刻したという記録が残っている。）また、午道は、五百羅漢像と常夜燈を刻みはじめたが、他寺に移ったため、未完成のまま今に残っているとのことだ。

鈴熊寺は、大友宗麟の子の使僧が活躍していたとされており、もしかしたら桂昌寺も同じような存在だったのかもしれない。そうすれば、宗麟が桂昌寺に宝冠釈迦如来を置いた由来も理解できる。

密教から派生した山岳仏教の地、安心院町における、禅宗や浄土教の仏たち。キリスト教や蘭学に心酔した支配者にも大切にされていた。安心院という地に描かれた「まんだら」である。

麻子は、自分の投稿『山岳仏教地域における多宗派の仏像 ～ 大分県宇佐市安心院町の仏たち』が掲載された仏教美術季刊誌を、安心院町の御筆さんへ送った。御筆さんは、麻子が安心院町を訪ねた際、地獄極楽や檜本磨崖仏を案内していただいた安心院町観光協会のガイドである。

御筆さんは、安心院町在住の地元歴史愛好家たちを主対象とした同好会「弥生会」の事務局長もされている。その縁で、「弥生会」定例会の講演ゲストとして、麻子は再び安心院町へ向かうこととなった。

『安心院まんだら ～ 安心院で仏になろう』と題した麻子の講演。以下の通りである。

「ただいま御紹介に預かりました目賀原麻子でございます。

本日は、伝統ある弥生会の講演者としてお招きいただきまして、誠にありがとうございます。そして、私の講演に対して、こんなに多数の方に足をお運びいただきまして、本当に感謝致しております。」

「私が本日こうしてお話し致しますのは、こちら弥生会の事務局長さんでいらっしゃいます、御筆さんにお声をかけていただいたからなのです。

御筆さんとは、私が以前、桂昌寺の地獄極楽を御案内いただいた時に、初めてお目にかかりました。私は、安心院町のお隣り、別府市の出身でありながら、仏教美術を専攻する身でありながら、お恥ずかしいことに桂昌寺に来たのは、先日が初めてだったのです。

桂昌寺の地獄極楽については、別の機会に文章にさせていただきました。事前の資料として皆様にもお配りいただいていたと思います。」

（といて、麻子は、『山岳仏教地域における多宗派の仏像 ～ 大分県宇佐市安心院町の仏たち』のコピーを皆に示す。）

「今日は、同じ安心院町の中にある別の仏像群、磨崖仏についてお話しする予定にしております。こちら、桂昌寺と一緒に、御筆さんにガイドしていただいた所です。

ただ、その前に、『仏像の見分け方』と致しまして、仏像を見る際のポイントを少し御説明したいと存じます。歴史物、文化遺産にお詳しい皆様に対しまして、仏像の見分け方なんぞを申し上げるのは、文字通り、釈迦に説法の部分もあろうかと思いますが、どうぞお耳をお貸し下さい。」

「『仏像の見分け方』は、ここ安心院町出身の恵良光夫さんがお書きになった『仏像入門in福岡』にもとづいて御説明致します。」

（麻子、持参していた『仏像入門in福岡』のコピーを掲げる。）

「この『仏像入門in福岡』に出会った経過は、先程ご紹介しました私の文章『山岳仏教地域における多宗派の仏像』に述べております。

この原稿は、現在、福岡市にお住まいの恵良さんが、仏像初心者のために書いたものです。

仏像を見分けるポイントについて、仏像の知識を持たない方でも簡単に読み進めることができるようになっていきます。その後、福岡市からほど近い観世音寺と福岡市美術館を中心に、所有する重要文化財の仏像について説明されています。

私が面白いなと思いましたが、個々の仏像の説明の後に書かれている恵良さんの語りです。恵良さんが京都・奈良の仏像を訪ねた時のことなどが、ユーモア十分に紹介されています。

安心院の桂昌寺地獄極楽についても記述の中に登場します。極楽の出口に彫られた阿弥陀三尊の観音菩薩・勢至菩薩の手が、京都三千院のものに似ていると書かれています。」

「それでは、『仏像の見分け方』を具体的に説明していきましょう。恵良さんの原稿から引用した資料を用意しております。」

（麻子、該当するコピーを皆に示す。）

「恵良さんの説明、本当に分かりやすいんです。図をご覧になって下さいね。

まず、仏像の種類。如来、菩薩、明王、天という階層性になっているということです。それぞれの種類の見分け方の特徴としては・・・。」

（麻子、説明を続ける。）

「それから、如来を大きく四つに分けて、釈迦如来、阿弥陀如来、薬師如来、大日如来。それぞれの如来を中心としたグループをつくって、各グループに所属する下の階層の仏像たち、菩薩、明王、天を分類しています。確かに、実際に仏像を見る時には、このグループ内の組み合わせで配置されていることが多いです。

では、それぞれのグループの仏像を紹介していきましょう。」

（麻子は、各仏像の代表作を挙げながら、説明を続ける。『仏像の見分け方』の箇所で、約十五分は要したか。）

「以上が、『仏像の見分け方』の基本です。おおまかな所を御理解いただけましたでしょうか。」

（一同、うなづく。）

「あら、だいぶ時間を費やしてしまいましたので、本題の方に戻らねばなりません。

それでは、今日の主題、磨崖仏のことをお話し致します。

まず、磨崖仏そのものについて御説明します。お手持ちの資料をご覧下さい。そうです、今日の講演の資料の方ですね。」

（麻子は、該当するコピーを示す。）

「はじめに、磨崖仏とは何かということです。

磨崖仏とよく似た範疇のものとして、石仏があげられると思います。磨崖仏と石仏とは、どう違うのでしょ

うか。
石を素材とした仏像彫刻であるという点で、磨崖仏と石仏とは共通しています。ただし、石仏は、移動させることができたり、周りを廻って見るることができるもののことを言います。
それに対して、磨崖仏は、天然の岩壁や、巨大な岩の塊の表面に彫刻したものですから、前の方からだけ見ることはできますが、切り離さない限り移動させることはできません。」

「ところで、日本にある磨崖仏の代表的なものうち、何と八割が大分県内に存在しているんですけど、皆さん、御存知でしたか？」
(会場内、へえ～、ほおーっ、という感嘆の声が聞こえる。)
「よくテレビなどでも、〇〇日本一の都道府県はどこでしょう？　なんてクイズを聞きますが、磨崖仏日本一の問いを見かけたことはないですよ。」
(会場、うなづく者が多い。)
「大分県は、温泉だけじゃなくて、磨崖仏でも日本一なんです。これは誇ってよい文化だと思いますね。」

「それでは、どうして大分県に磨崖仏が多いのでしょうか？」
(会場、首をかしげる者が多い。)
「大分県に磨崖仏がなぜ多く存在するのかという問題については、実はよく分かっていない点が多いようです。宇佐八幡の影響で、当時、奈良地方に多かった渡来人、帰化人が宇佐地方にやってきて、技術を伝えたとも言われていますが、どうなのでしょう。渡来人の人数そのものではなく、当時の都、奈良地方の方がよほど多かったでしょうから、その理論からすると、奈良が磨崖仏日本一になっても良さそうなものです。
それよりも、やはり大分県に温泉が豊富なことと、磨崖仏が多いことが大いに関係していると思います。火山の影響で温泉が湧き出る訳ですが、同じ火山活動の結果として、良質な凝灰岩が広がることになります。この凝灰岩が、磨崖仏をつくるのに、うってつけの性質を持っているのです。」

「さて、その大分県内の磨崖仏についてですが、所在地を大きく分けると、(一)県北部宇佐・国東半島地区、(二)県中部大分・大野川流域地区、(三)県南部臼杵地区、の三地区に分けられます。
この中で、一番有名なのは、皆様も御存知の通り、臼杵の石仏ですね。これは、国宝にも指定されています。あ、石仏じゃなくて、正確には磨崖仏ですね。
でも、私が子どもの頃は、臼杵磨崖仏の代表ともいえる、あの大日如来の頭の部分は、ずっとそれだけで拝まれていました。『臼杵せんべい』の包装紙だって、ずっとその写真でしたから、もともとそんな仏様かと思えますよね。」
(会場、苦笑しながらうなづく。)
「だから、大日如来の頭部が本来の胴体の上に戻された時、逆にとても違和感をおぼえました。ただ、その姿になることで、やっと、石仏ではなくて磨崖仏であることが納得できますね。」

「臼杵のことはさておき、この県北地域の磨崖仏の話に戻しましょう。
県北地域の磨崖仏は、山あいの土地に、孤立してつくられています。檜本磨崖仏もそうですが、国東半島にある磨崖仏を思い浮かべても、その通りです。
あっ、写真をご覧になりながら、お聞きいただきましょうか。照明を少し落として下さい。」
(照明、やや暗くなる。)
「ありがとうございます。」
(麻子、自分でコンピューターを操作し、一枚目をスクリーンに映し出す。檜本磨崖仏の全景が映し出される。)

「大分県北部にある磨崖仏の技術的な特徴としては、岩から浮かせたように彫っていて、仏様の肉付きは薄いんです。それこそ、臼杵石仏の、石仏を彫りぬいたかに思われるような肉付きとは違って、岩に描いた絵のようですよ。これも、県北部と県南部にある凝灰岩の質の違いによって、磨崖仏を彫る技術にも違いが生じたと考えられています。
仏様のお顔は、面長のものが多いです。臼杵の大日如来のような、丸顔の仏様はあまりお見かけしません。
磨崖仏のほとんどは、天然の岩壁に露出して、遮るものはなく、風雨にさらされることをはじめから覚悟されているようです。民衆とともに存在した磨崖仏ですが、そのために、磨崖仏の傷みは進んでいます。檜本磨崖仏もそうですね。」

「安心院町には、檜本磨崖仏の他にも、下市磨崖仏という価値ある磨崖仏があります。が、今回は、私が案内いただいた檜本磨崖仏を中心にお話し致します。
檜本磨崖仏は、ご存知の通り、安心院町檜本地区の杉林の中にあります。県道の岡バス停の所から登っていく良い道ができていますね。
檜本磨崖仏は、上下二段に重なった巨大な凝灰岩の表面に、総数四十五体が彫られています。ひとつひとつの仏像の高さは、五十センチ程から二メートルまで、大小様々な大きさです。
上の段、不動明王像の向かって右に、『応永三十五年申戌三月』ほか、不明瞭な数字の墨書が見られるので、ほぼその頃につくられたと考えられています。西暦に直すと、一四二八年、室町時代のことです。
国東の熊野磨崖仏や、臼杵石仏などがつくられたのは、平安時代、天台宗の密教文化が盛んだった頃ですから、檜本磨崖仏が彫られたのはずっと後のことになります。」

(麻子、写真を次に送る。檜本磨崖仏の各部の拡大写真を進めながら、説明を続ける。)
「檜本磨崖仏には、上段の不動明王像を中心として、薬師三尊・十二神将・釈迦三尊・大日如来・地藏菩薩・十王像などが刻まれています。
本来、磨崖仏全体を密教の曼荼羅図的に完成させるならば、大日如来像が中心となって、他の仏像が整然と配列されるべきです。
ところが、檜本磨崖仏では、不動明王が全体の主役のように、最も上の段に、最も大きく表現されています。」

そして、大日如来をはじめとする他の像は、脇役に配列されています。

密教が全盛をふるった平安時代から、長い時間を経た室町時代。かつ、都から遠く離れた地方において、仏教の教えにも多少混乱があったのかもしれませんが。

室町時代には、国東半島を中心に、地獄の十王像や俱生神が石仏に彫られるようになっていきます。あ、俱生神というのは、閻魔大王の横にいて、亡き人の生前の記録を読み上げる、嫌な奴のことですね。これは、仏教の信者離れを防ぐために、地獄思想を広めて、寺院の支配力を維持しようと努めた結果だとの見方もあります。

いずれにせよ、中心となる不動明王の顔つきには、漫画を見ているようなこっけいさがある、いかにも地方の作らしい土臭さが、全体にあふれていると言われています。」

「ところで、檜本磨崖仏に彫られている四十五体という仏像の数、これはものすごい数なんです。白杵石仏よりもずっと数が多くて、日本一なんです。」

(会場内、またへえ～、ほおっ、という感嘆の声が聞こえる。)

「御自分の身近な所に、そんなすごいものがあるなんて・・・、本当にすごいでしょ、としか言いようがありませんよね。」

そして、仏像数が多い分、仏像の種類も多いんです。」

(麻子、次の写真を映し出す。そこには、『仏像入門in福岡』の『仏像の見分け方』から引用した図が組み合わされている。釈迦如来、阿弥陀如来、薬師如来、大日如来を中心とするそれぞれの仏像グループの分類図が示されている。)

「これは、最初にお話しした恵良さんの原稿からいただいた図です。各如来を中心とした四つのグループに分けて、それぞれのグループに属する仏像の名前を示しています。よくみておいて下さいね。」

(少し間を置いて、麻子、次の写真へ送る。)

「こちらは、檜本磨崖仏に彫られている仏像の種類を、実際の位置関係のままに書いています。ご覧下さい。ここに釈迦三尊像、こちらに阿弥陀三尊、それから薬師三尊もあります。薬師如来のグループに属する眷属、家来たちですね、その十二神将もちゃんとあるのですよ。もちろん、大日如来も、その部下の不動明王も彫られています。仏像たちを護るために、両脇には金剛力士像もいらっしゃいますよ。」

「このように多くの種類の仏像が描かれているものを何と呼んでいるのでしょうか。そうですね、『まんだら』です。『まんだら』とは、狭い意味では、密教における仏の関係を描いた図のことを指しますが、広い意味では密教に限ったものではありません。浄土教においても、『浄土涅槃曼荼羅』などに多くの数の仏像が描かれています。」

「そういった視点から、檜本磨崖仏をもう一度見て下さい。」

(麻子、檜本磨崖仏の全景の写真を映す。)

「これ、見事に『まんだら』になっていると考えられませんか。岩に彫られた巨大なまんだらです。宗派なんてありません。仏教、仏の教えに従う民衆のためのまんだらです。」

(『仏像入門in福岡』で示されたと同じように、豊富な種類の仏像を有する檜本磨崖仏の説明を終え、麻子はまるで、失踪した恵良さんの思いを果たすようであった。それはさらに、松本清張の『陸行水行』で描かれているロマンを追って失踪した主人公の思いにも応えていた。)

(麻子、なお語る。)

「そもそも、仏教というのは、釈迦のように悟りを開いた人物、ブッダになろうとする教えのことです。時代が下って、いろんな宗派が生まれて、細かい教えに違いも出てきましたが、仏教の基本はブッダを目指すことです。すなわち、自分も『仏になろう』ということなのです。」

ブッダを目指すことを、山へ登ることに例えてみましょう。自力で登れる人は自力で山に登りますし、それが可能でない人はケーブルカーで登ります。でも、山へ登るのはみんな同じです。仏教の宗派で自力本願なもの、他力本願なもののように分類されることもありますが、みんな目指すものは同じなのです。目指すものが同じならば、宗派にこだわらずにブッダをめざす仏教徒がいてもいいですね。」

日本の仏教が葬式仏教と揶揄されて久しいですが、近年では、釈迦の教えそのものを見直そうという動きがあります。僧侶の中でも、それぞれの宗派をこえて、仏教徒として活動を行うグループも出てきています。」

「あ、写真はもう結構です。照明を上げていただけますか。」

(麻子、さらに語る。)

「仏教の多様性ということに付け加えますと、宇佐地域は、神仏習合の発祥の地と言われています。御存知の通り、東大寺と宇佐八幡宮の関係ですね。東大寺が建立される際、奈良から遠いこの宇佐神宮から神様をいただいて、東大寺の中に手向山八幡宮として祀られています。逆に、宇佐神宮の中には、弥勒寺という大きな神宮寺、神社の中のお寺がつくられていました。」

そんな神仏習合の歴史をずっと守り抜いてきたこの地方の文化の力を、私は高く評価したいと思います。」

過去には、大友宗麟による寺社の焼き討ちもあったでしょう。檜本磨崖仏も、今でこそ市の文化財として保護されていますが、指定を受けるまでは村落の有志の人が守ってきたと聞いています。数々の困難や試練をこえて、現在の史跡があるのです。」

「日本人の多くは、自分たちが無宗教だと思っています。お正月は神社に初詣、クリスマスはキリスト教的なイベント、大晦日はお寺で除夜の鐘といった風に、節操がないと自嘲してしまいます。」

でも、決してそれは無宗教という訳ではなく、信仰をもっていないと錯覚しているだけなのではないでしょうか。自分たちが、宗教の世界に生活のすべてを投げうってはまり込んでいないからなのですが、逆に言えば、日本人は、宗教と長くそして密接に関係を結んできたことで、宗教と節度をもって接しているのです。宗教に簡単にはのめり込んでいかないだけのことなのです。」

これだけの宗教的史跡を大切にしている日本人の、どこが無宗教だというのでしょうかね。」

(麻子、手元の時計を見ながら)

「最後に、同じ大分県人からの提案を一つ。」

昨年、岩手県の平泉中尊寺を中心とする地域が、浄土をテーマにしていることを評価されて、世界遺産に選ば

れましたね。ここ大分県でも似たようなテーマで、世界遺産とは申しませんが、さらなる観光開発でもいかがでしょうか。

温泉が噴出する別府では、御存知の地獄めぐり。清らかな広い境内を持つ宇佐神宮は、やはり極楽にたとえて良いでしょう。そのちょうど中間にある安心院は、地獄極楽のいずれをも持つ『まんだら』の土地となります。

その安心院で、桂昌寺や檜本磨崖仏にある多種類の仏像たち、すなわち『まんだら』を見学して仏教を理解するというツアーの企画もいいですね。名づけて、『安心院で仏になろう』なんてところでしょうか。

いろいろと述べて参りましたが、何だかワクワクしてきましたところで、そろそろ予定の時間となりました。今回、こちらで講演する機会を与えていただいたことで、私も改めて勉強することが多く、本当に感謝の気持ち一杯です。これからも私の専門領域において、大分県に何らかの形でお力添えできれば幸いに存じます。

御静聴、どうもありがとうございました。」

(会場から、多大な拍手。麻子、何度も頭を下げる。)

(この後、会場からの質疑応答に進む模様。)

完

参考文献

参考文献（順不同）

- 仏像入門in福岡（小池楓生子著）（文芸社）
- 桂昌寺より（古恵良桂子著）（九州総合文化社『九州往来』より）
- 洞窟『地獄極楽』案内（古恵良菊男著）（安心院縄文会『安心院縄文』第16集より）
- 安心院史跡めぐり（安心院町観光協会ボランティアガイド部会）
- 安心院の里（安心院町、安心院町観光協会、安心院文化連盟）
- 大分の磨崖仏（岩男順、窪田勝典著）（九環）
- 豊後の磨崖仏散歩（渡辺克己著）（双林社）
- 日本の石仏1（九州篇）（賀川光夫編）（国書刊行会）
- 磨崖仏紀行（邊見泰子著）（平凡社）
- 梅原猛の授業 仏教（梅原猛著）（朝日文庫）
- 梅原猛の授業 仏になろう（梅原猛著）（朝日文庫）
- 神も仏も大好きな日本人（島田裕巳著）（ちくま新書）
- 輝く日の宮（丸谷才一著）（講談社文庫）
- 陸行水行（松本清張著）（新潮文庫『駅路』より）
- 火の記憶（松本清張著）（新潮文庫『或る「小倉日記」伝』より）
- 更級日記（菅原孝標女著）